

## 近世怪談集と中国説話

——『拾遺御伽婢子』を中心に——

神明 あさ子

はじめに

近世は怪談本の流行した時代である。その嚆矢となった書が、浅井了意『伽婢子』（寛文六（一六六六）年刊）であることは周知であろう。同書は、中国説話の翻案という手法を用いた怪談集で、後続作品に大きな影響を与えた。しかし、同系統の作品の中で、『伽婢子』をはじめとする一部を除いては、十分に研究が進んでいるとは言いがたい。『伽婢子』以外にも興味深い作品がたくさんある。そこで本稿では、時代的にも早い『拾遺御伽婢子』を取りあげる。同作品の主な先行研究は、次の二つである。

まず麻生磯次氏『江戸文学と中国文学』（三省堂、一九四六年）は、『拾遺御伽婢子』巻二の一「遊魂之契」を『離魂記』に、巻二の四「騎呼夢語」を『楊太真外伝』に、巻三の一「因果之明鏡」を

『摺神腥説』に、巻五の三「依業因糞土入死」を『季赤伝』に依拠するとした。その後、神谷勝広氏『近世文学と和製類書』（若草書房、一九九九年）は、「騎呼夢語」と「因果之明鏡」は、和製類書である『訓蒙故事要言』を介して中国説話を取り入れたことを指摘し、他に巻三の二「世垢雪岩水」、巻四の一「魚腹之鏡」を加えた計四話が、直接には『訓蒙故事要言』に拠るものであることを明らかにした。しかしながら、この二つの研究は典拠の指摘にとどまり、作者が典拠以外の部分をどのように創作したかまでは言及していないことが問題である。本稿では、『拾遺御伽婢子』について、まず新たに発見した中国典拠を四つ指摘する。その上で、典拠以外の部分に注目し、作者がいかに巧みに創作を行っているかを考察していきたい。

## 一、卷二の二「雷之言話」

『宮川道達編『訓蒙故事要言』(元禄七(一六九四)年刊)は、漢籍の故事要言を天地・人君・人臣・父子・兄弟・夫婦・朋友・禽獸・雜門等の諸門に分けて選出し、注釈を加えた書である。『拾遺御伽婢子』には、先行研究での指摘の他にも二話、『訓蒙故事要言』に拠る章段がある。

その一つ目、卷二の二「雷之言話」の全文を次にあげる。

関白秀吉公いまだ羽柴筑前守と申ける比、播州姫路に在城し給ひし刻、城外一里程わきに、大き成榎あり。時に夏半なりしに墨雲たな引わたり、稲光しきりなりしに、雷崩る、がごとく鳴はためき、雨うつすが如く、終にかの榎におちかゝりて、此木二つに裂け、その間に雷はさまれたり、動揺する事おびたし。しばしあつて空はれたれども、彼榎の辺、雲とちて動揺やます。国中の貴賤あつまりて、是をうかゝひ見るに、雲、榎枝をかすめ、文色つまびらかならず。怖て近く者なし。秀吉公聞召、かの所に行て見給ふに、人の申に違はず。雲ふかく霧とちて、そのわかちさだかならず。秀吉公すなはち雲霧をわけて、樹下にちかづき寄給ふとき、はなはだへきあきつよふして、動揺する事夥し。されども秀吉公少もおそれ給はず、樹下に立寄つての

たまひけるは、「それ雷は陽氣を体とす。ゆへに夏のはじめおこつて、万物をそう長し。五穀はにかけてみゆる。全他の害をなさずと聞しが、かかる妖怪をなす事心得かたし。」との給ふ。ときに樹上よりうはがれたる声にて答へけるは、「我はずなはち雲雷なり。汝が申ごとく陽とくをそなへて、五穀を成就せしめ、または衆生の善悪を正し、積悪の家に落てわざわひをなし、其悪をいましむ。全横道のわざわひをなさず。然るに此榎のうちに毒龍ありて、人民に災をなさんと、天帝是をいかりて、すなはち我にめひじてうたしむ。我是をうつにあやまりて、劈としてその中狭にはさまれたり。君ねがはくは仁愛をたれて、我を再、雲上にかへる事を得せしめ給へ。しからは必その高恩を報ぜん。」と、いひ畢て暫動揺止みぬ。秀吉公すなはち番匠を召て、この木を挽割せ給ふに、雲漸々と空につらなり、雲上に鳴ひきて虚空に飛さりぬ。それより程なく信長をあけち日向の守しゐして後、秀吉公大軍をおこし明知を亡、唐までしたがへ、武威を四海にふるひ給ふ事、併雲雷の利生をほどこしけるなりといひつたへたれ。<sup>(1)</sup>

これが、『訓蒙故事要言』卷一天地門八一「雷公夾樹」、太平広記云、唐ノ代州ノ西ノ方十余里ニ大ナル槐ノ木アリ。嘗テ夏ノ時、天俄ニ黒雲垂覆雷鳴霹靂閃キ輝キテ雷槐ノ木ニ落タ

り。<sup>②</sup>木已ニ裂、雷ハ裂タル木ニ夾レテ吼ルコト霹靂ノ震声ノ如シ、諸人集マリ觀ル。其吼声ニ恐レテ近寄ル者ナシ。狄仁傑ハ賢才ノ人ナリ、代州ノ国守トナリテ国事ヲ治ム。此ヲ聞テ自ラ行テ、此ヲ見テ進近迫テ是ヲ問ヘバ、雷答テ、「此木ニ龍アリテ住コト年久シ。天帝ニ乖コト有テ我ニ命ジテ逐シム。我此ヲ撃ント欲シテ、落ル勢ニ堪ズシテ還テ此ノ木ノ為ニ夾レタリ。若我ヲ相救フ者アラバ、当ニ厚ク此恩ヲ報ゼン」と云。<sup>⑤</sup>狄仁傑則工匠ヲ召テ鋸ヲ以テ木ヲ挽破シムルニ、雷マサニ出ルコトヲ得テ、雲ヲ興シテ天ニ還リ昇ル。<sup>⑥</sup>是ヨリ狄仁傑日々ニ官位昇進シテ天下ノ宰相トナリ、家富榮主フコト、雷ノ報恩ニ由テナリ。<sup>②</sup>をふまえることは、①大木に雷が落ちる、②大木は裂け、雷は木の間に挟まる、③国を治める者が、雷に近づき問いかける、④雷は、天帝の命で木に棲む毒龍を撃つために落ちたのだと答える、⑤木を割って雷を天へ還す、⑥雷の報恩によって立身出世を果たす、という展開が一致することから、明らかである。典拠の『訓蒙故事要言』で雷を助ける狄仁傑を、『拾遺御伽婢子』では秀吉に変えている。『拾遺御伽婢子』は、江戸で刊行されたゆえか、武士の登場する話が多く、同じく『訓蒙故事要言』に拠る巻二の四「鵲呼夢語」も、原話での玄宗皇帝を足利義政に変えており、著名な武将の名を出すことで舞台を日本に置き換えている。他の章段では、陶晴賢、

武田信玄、徳川家康などの名も見える。

本話における作者の工夫は、秀吉と雷の会話部分であろう。『訓蒙故事要言』には狄仁傑の台詞はなく、波線部Aの秀吉の言葉は『拾遺御伽婢子』で新たに創作された。秀吉は「かかる妖怪をなす事心得かたし」と雷を責め、それに対して雷は、波線部Bで己の功德を言い訳がましく語る。これは『訓蒙故事要言』には見られない。そして雷が天へ還してくれるよう頼む部分では、『拾遺御伽婢子』は敬語を加え、雷が秀吉に対して下手に出ているような印象を与える。秀吉に責められた雷が弁明し、頼みを聞いてくれるように懇願しているかのである。さらに雷の声について、『訓蒙故事要言』の「吼ルコト霹靂ノ震声ノ如シ」に対して、『拾遺御伽婢子』は「うはがれたる声」と描写する。つまり『拾遺御伽婢子』では雷を、人智を超えた存在としてではなく、人間臭い身近なものとして造型し、やわらかみや滑稽味を付している。章題が、「雷公夾樹」から「雷之言語」に変えられていることから、作者が雷の会話に重きを置いていたことが読みとれよう。

## 二、巻二の五「因」武功「見」龍宮」

二つ目、巻二の五「因」武功「見」龍宮」も、舞台を日本に置き換える際、興味深い工夫が施されている。まず典拠である『訓蒙故事

要言』卷八禽獸門二二〇「猩々跨象」の、全文を次にあげる。

太平広記ニ、唐ノ敬宗ノ宝曆年中ニ、勇者ノ名ヲ得タル武ト云人アリ。夜門ヲ叩者アリ、戸ヲ開テ窺見ルニ一ノ猩々白象ニ跨テ来ル。武、「何事ゾ」ト問ヘバ、猩々ガ曰、「此象ニ豨アリ。

我能言コトヲ知ル、ヨツテ吾ヲ載テ来ル」、武ガ曰、「豨トハ何事ゾヤ」、猩々ガ曰、「此山ノ南二百余里ニ岩穴アリ、其中ニ巴蛇アリ、長キコト数尺目ハ電光ノ如ク其牙ハ劍刃ノ如シ、象ノ呑ル、コト其数ヲ知ズ。願ハハス殺シテタビ玉ヘ」ト云。武不便ノ事ニ思ヒ、毒ヲ矢ニ淬テ其処ニ到ル。果シテ双目鏡ヲカケタルガ如、岩ノ下ニアリ。武則弓ヲ張テ一發ス。其目ニ中ル時、象則武ヲ負テ奔、俄ニ穴中雷孔スル事夥シ、蛇躍出テ蝮テ死ス。乃穴ノ中ノ側ヲ見レバ、象骨山ノ如ニ積タリ。時二十象来リ、<sup>⑦</sup>各紅牙一株ヲ鼻ヲ以テ卷テ、武ニ獻ジ跪テ礼ヲナセリ。博物志曰、巴蛇呑象三歳出其骨トアリ。

これを、『拾遺御伽婢子』ではどのようにふくらませて日本の話に置き換えているのか見ていきたい。まず人物は、「武ト云人」の代わりに、勢州安濃津の文武に秀でた侍、羽山藤太夫として設定される。ある夜、羽山の家の門を叩く者があり、開けてみると、

<sup>①</sup> 其長三尺ばかりなる小人なり。大きななる亀に乗りきたる。月影に見れば頭は赤ふして紅のごとく、身には絹布のわかちも見へ

ざる物をちやくしたり。羽山その有様の異相なる事をあやしんで、刀の柄に手をかけ、「おのれ何ものなればあやしき姿あらはすや。人にこそよれ、此羽山をたふらかさんとは思ひもよらず」と申ければ、その時彼異人、「御不審は尤なり。我海底に住猩々と云ふ者なり。これなる亀年ころ位をあらそふ大敵あり。是を君の手をかりて退治せんがため、たのみみ奉る所なり。しかるを我よくものいふ者なるがゆへに、かめにやとはれきたりし」と答ふ。

という、猩々が頼み事に来る展開は同じで、白象を亀に変えている点のみが異なる。白象を亀に変えるにあたって、敵は巴蛇から鯨に、舞台は山から龍宮に変えられる。この後、羽山は亀の背に乗せられて海へ入り、龍宮に至り手厚いもてなしを受ける。もてなしの場面は『訓蒙故事要言』では全くないにもかかわらず、『拾遺御伽婢子』においては、

<sup>A</sup> 白波左右へわかれて、海中十四五町も行ぬらんと思ひたれば、かうくたる平沙に出たり。蒼天白日常のごとし。こわそもふしぎの世界に來りしものかなと、あたりを見めぐらすに、草木土石の宮うるはしき事な、めならず。めなれさるてひ言語につくしがたし。扱かめよりおりしかば、亀はいづちともなくせぬ。ときに先の異人、こなたへきたり給へと道びき行、そのあいた

十町斗も過なんと思へば、一つの楼門に至る。そのきれいこんしやうなる事いふ斗なし。内に入ぬれば、ひとつの金殿あり。その美なる事又言語のおよばざる所なり。四方にしよつかふ百千の錦をかけたなり。庭には七宝の砂をしきみり。桃李のほなおのつから咲みだれて、長生殿もかくや。我かのけしきにて、あやしや天上にいたりぬるかとあやしき程の美なり。

と、龍宮について詳しく描写され、さらに、種々の珍珠をさ、げて羽山を饗応す。其器給仕の男女等、皆小魚をいたゞきし物なり。諸の魚精と見ゆ。

とあつて、羽山が龍宮にて歓待される様子が続く。龍宮でしばらく時を過ごしていると、敵である鯨が襲来し、羽山は弓矢を構える。

この場面も、

羽山は二所とうのぬり丹の弓にせき弦かけ、十五そく三つぶせ、真羽に雁股のわたり八寸斗なるこみを筈もとまで打ち込たるを、<sup>F</sup>わする、斗引しほり、南無八幡大ぼさつと観念してはなつ

に、あやまたず彼山のことくなるもの頂へはつしとあたつて、脳をくだきてそたちにける。射られてどうやうする事おぼた、しうして、<sup>G</sup>地に倒る、ひびき地震のごとし。

とあるように、『訓蒙故事要言』より詳しくなっている。龍宮の様子と弓矢の描写は、『拾遺御伽婢子』で独自に加えられた部分であ

る。なぜ舞台は龍宮に設定され、これらの描写が付加されたのだろうか。

本話では、依頼されて敵を退治し、その舞台が龍宮に設定されている。この二点からは、俵藤太伝説が想起される。俵藤太秀郷が、近江の国勢田の橋の龍神に頼まれ、龍宮に行きムカデを退治する話である。これは『太平記』に初出し、御伽草子の『俵藤太物語』などによって広く人口に膾炙した。『太平記』巻第十五「三井寺合戦并当寺撞鐘の事付俵藤太が事」には、龍宮の様子と俵藤太がムカデを射る場面が、

二人共<sup>A</sup>湖水ノ波ヲ分テ。水中ニ入事五十余町有テ。一ノ楼門<sup>B</sup>アリ開テ内へ入ルニ瑠璃ノ沙厚ク。玉ノ鬢暖ニシテ。落花自續<sup>C</sup>紛タリ。朱楼紫殿玉欄干。金ヲ鎚ニシ銀ヲ柱トセリ。其壯観奇麗未曾テ目ニモ不<sup>D</sup>見。耳ニモ聞ザリシ所也。此怪シゲナリツル男。先内へ入テ。須臾ノ間ニ衣冠ヲ正シクシテ。秀郷ヲ客位ニ請ズ。左右侍衛官前後花ノ粧。善尽シ美尽セリ。酒宴数刻ニ及テ。夜既ニ深ケレハ。敵ノ可<sup>E</sup>寄程ニ成ヌト。周章騒グ。秀郷ハ一生涯方間。身ヲ放タテ持タリケル五人張ニセキ弦懸テ嚙<sup>F</sup>ヒ濕シ。三年竹ノ節近ナルヲ十五束ニ拵ヘテ。鎌ノ中子ヲ<sup>G</sup>筈本迄。打トホシニシタル矢。只三筋ヲ手挟ミテ。今ヤ〜トソ待タリケル。夜半過ル程ニ。雨風一通り過テ。電火ノ激スル

事隙ナシ。暫有テ。比良ノ高峯ノ方ヨリ。焼松二三千ガホト二行ニ燃テ。中ニ嶋ノ如ナル物。此龍宮城ヲ指テゾ近付ケル。事ノ体ヲ能々見ニ。二行ニトホセル焼松ハ。皆己ガ左右ノ手ニトモシタリト見ヘタリ。アハレ是ハ百足蛟ノ化タルヨト心得テ。矢比近ク成ケレハ。件ノ五人張二十五束三伏。<sup>F</sup>忘ル、計引シホリテ。眉間ノ真中ヲゾ射タリケル。(中略)嶋ノ如ニ有ツル物。<sup>G</sup>倒ル、音大地ヲ響カセリ。

と書かれる。点線部 A-G が、「拾遺御伽婢子」と依藤太伝説で描写が近似する部分である。A 波を分けて龍宮へ向かう、B 楼門に至る、C 花が咲き乱れている、D・E 弓矢に関する描写、F 「忘るるばかり引きしほり」の語、G 敵が地響きを立てて倒れることが描かれているが、中でも D・E の弓矢に関する描写に注目したい。標準の十二束に比べて特殊な大矢である「十五束三伏」という語が一致する。よって、「拾遺御伽婢子」の、中国典拠に拠らない部分は、依藤太伝説を参照したと考えられる。侍の名である「羽山藤太夫」も、依藤太の「藤太」から名付けられたのであろう。

本話の生成を考えると、典拠である『訓蒙故事要言』を翻案する際、頼まれて敵を退治することから依藤太伝説を連想し、それによって舞台が龍宮に設定され、原話にはなかった、侍が饗応される場面が付加された。さらに依藤太伝説を参考にして、敵を倒す場面

描写も詳しくなり、臨場感を添える。そして最後に、お礼としてもらう宝も、原話での象牙を、

ふたつの宝をいたしあとふ。その時に亀かたりていはく、「此うす衣は是これを著しぬれば、人前にありといへども人知る事なし。又此槌はうちての小槌なり。是を用れば心にしたがつて万宝をうる。此度の御札に是を奉る」

として、着れば姿の見えなくなる「うす衣」、つまり隠れ蓑と、「打出の小槌」に変えている。これらは『天悦物語』や『一寸法師』をはじめとする御伽草子や謡曲・狂言などにもよく登場しており、原話の象牙に比べて日本色を強める働きをしているといえよう。本話は、中国説話を典拠としながら、以上のような工夫によって日本化を図り、日本の話に見せることに成功しているのである。

### 三、巻五の一「因武功止儀」

『拾遺御伽婢子』は中国説話を取り入れるのに、『訓蒙故事要言』の他、『怪談全書』も利用している。林羅山『怪談全書』（元禄十一（一六九八）年刊）は、中国の史書や志怪の書から三十二話を採用して翻訳した怪談集である。『怪談全書』を利用したと考えられる章段二つのうち、一つ目「因武功止儀」は、次のような話である。

武田の軍士引田安左衛門は、参州三方ヶ原の戦で武田方の敗北に

よつて甲府を逃れ出て、伯耆国汗入に至る。そこで宿の主人から、明日の鎮守の祭で一人の女子が人身御供にされることを聞き、不審に思い、翌日の夜、宮へ行く。生贄の女子に助けを乞われた引田は、神の正体を暴こうと宮に忍ぶ。子の刻になり、怪しい物が集まってきた女子に襲いかかったので、引田が取り押さえると正体は古狸であった。引田は狸を殺して女子を救い、その後は秀吉に仕官して子孫は繁盛した。

これは、『怪談全書』巻四の一「郭元振」と、①ある里にて、美しい女子を生贄に供えなければ災いを起こすという神の話を聞く、②神は人に幸をもたらずものであり、逆に人に害をなすは誠の神にあらずと考える、③問題の社へ行くと、人々はおらず、生贄の女子のみが泣き悲しんでいる、④女子を憐れんで、力を尽して命を助けることを約束する、⑤女子は生贄になった理由を説明する、⑥複数の邪神がやってくる、⑦邪神をとらえてみると、正体は獣であった、⑧女子を伴ってその地を去り、子孫まで栄えた、という展開が合致する。

しかし、前述の『訓蒙故事要言』の二例のような素直な利用ではなく、『怪談全書』では邪神に「相公」と呼ばれたために、自分のちに宰相になることを悟る場面があるが、『拾遺御伽婢子』ではこれは省かれ、邪神を殺し生贄を助けることに絞って書かれる。

また、新たに創作した部分が多く、『怪談全書』と一致する項目も順序を入れ替えて再構成している。文辞が近似する例を挙げると、⑤の箇所の子の台詞で、『怪談全書』では、

「我父、イマ里人ノ、錢五百貫ヲ受テ、我ヲウリ。今夕、男女多ク送來テ、酒宴シ、我ヲ酔シメテ。此堂中ニステヲキ、門ヲトザシテ、歸去ル。既ニ、父母ニ弁ラレヌレバ、必ス死ナンコトヲ、カナシミ啼、ナゲクナリ。君、若、我ヲタスケタマハ、君ニツカへ奉ン」<sup>④</sup>

と書かれ、『拾遺御伽婢子』では、

「父は、にはおんみつして、今此里人の錢五貫文に我身をうりて、父は、のかたへひそかにおくり、たつぎの助となし、今宵、悪いのために命をおとさんとす。君もし我命をたすけ給は、ながく仕へ奉らん

となっている。A・Bの語句を似せた上で、原話では、父母に売られて生贄にされたと書かれるのを、『拾遺御伽婢子』では、女子自らの意志で、貧しい父母に金を贈るために身を売ったという孝行の美談に変えている。

一方、⑥の複数の邪神に関する描写では、『怪談全書』は「車馬ニノリタルモノ」「紫衣キタルモノ」「黄衣ノモノ」のように様子や衣の色で邪神を区別しているのに対し、『拾遺御伽婢子』は、

引田すはやとうかゞひ見るに、その面猿のごとくにして、青きじやう衣を着し、長五尺斗なるもの、はひでんにあがり、座上に坐したり。又その面熊のごとくにて、身体人のごとくなるものあり。異類いぎやうのばけ物、みな庭になみ居たり。や、しばらくあつて又来る物あり。長四尺斗、身体さどくして、いづれあやしき物、是も拝殿にあがりぬ。座定まつて後、猿の面なるもの申けるは、「我此所にあつて久しく犧を請る事、是しかなながら各我威をたすけて、わざはひをなすゆへ也。いそぎ性をわけあたへん。」それへとげじなせは、熊のごとくなる物、

狼のかたち成るものおのく立て、大き成るまな板に庖丁取そへ庭になをし、扱かの女子を引出さんとす。

として、獣の名で区別するという違いが見られる。これには、『怪談全書』の他の章段からの影響が考えられる。巻五の三「巴西侯」である。これも獣の化けた邪神たちが人を食おうとして退治される話で、邪神の正体がわかる場面は、

一ノ大猿、形人ノゴトクニシテ、酔テ地ニ伏ス。是、巴西侯ナリ。又、一ノ熊、前ニ伏ス、コレ六雄将ナリ。又、其マヘニ、白キ項ノ虎、酔テ伏ス、コレ白額侯ナリ。一の狼アリ、是、滄浪君ナリ。又、一ノ豹アリ、是、五豹将ナリ。又、一の瘰、一ノ狐アリ、其前ニ伏ス、コレ鉅鹿侯、玄丘狡尉ナリ。皆同ク酔

伏シテ、正体ナシ。

と書かれ、大猿、熊、虎、狼、豹、鹿、狐の名が連なる。『拾遺御伽婢子』の、猿、熊、狼の記述は、ここから来ているのではないか。作者は、『怪談全書』の「郭元振」を翻案する際、同じような獣の邪神の怪異を扱う「巴西侯」をも取り入れて、「因<sub>二</sub>武功<sub>一</sub>止<sub>レ</sub>犧」を創作したと考えられる。

本話で興味深いのは、時期設定である。『怪談全書』では出来事の日時については書かれないが、『拾遺御伽婢子』では、神無月のことと設定され、引田は、

神明の祭は、大かた正五九月もちゆ、よ月をもちゆる事まれなり。取わけ神無月は、神事祭祀にもちいざと聞

と不審を抱く。たとえば『徒然草』第二〇二段にも、

十月を神無月と言ひて、神事にははかるべきよしは、記したる物なし。もと文も見えず。但し、当月、諸社の祭なき故に、この名あるか。

と書かれており、はっきり文献には記されないとはいながらも、神無月に神事が行われなかったことがわかる。そういう慣習を受けて、敢えて神無月に設定することで、初めから、生贄を求める鎮守の神が誠の神にあらざることが暗示されており、我が国の風俗に合わせた工夫だといえよう。



ここまで、『拾遺御伽婢子』の三話を挙げ、人物、場所、日時などの巧みな設定によって日本化を図っていることを述べてきた。こうした典拠に関わらない部分にこそ、作者の工夫がうかがえ、注目すべきであることをおさえておきたい。

#### 四、卷二の一「遊魂之契」

第三節まで、場面設定について考察してきたが、他に日本化を図る手段として、古歌の挿入があげられる。『拾遺御伽婢子』卷二の一「遊魂之契」は、麻生磯次氏によって『離魂記』の翻案であることが指摘されている。進之丞という若者に恋焦がれた娘の魂が抜け出て、体は親元になりながら、魂のみが進之丞のもとに通い、子をなすという話である。娘はまず進之丞に文を送るのだが、その文には、

① ながらへば扱もあふ世のたのみと猶おしまる、我いのちかな  
 とは、いまだ頼ある心とこそ思ひ侍れ、うき身はかた様へ朝が  
 ほの日かけ待まの露のいのち、きゆるをまつ事にて候、むかし  
 男が茂の河なみにちかひて、神は請すやといひしふる事も心な  
 く、詠人の恋ちをき、ても、さまで哀なるさまにおもはざりし  
 が、今此身に思ひしり、忍ぶ思ひのつらさ、せめてあわれとと  
 わせ給へかし。人めのせきにさへられ、心のかどとちてくらし、  
 心のたけ思召知り給へ。

② 物思ふ泪のはてのいかならん逢をかぎりのなくてやみなば

③ づらからば猶うつせみの身をかへて後の世までや人を恋まし  
 と書かれる。歌が三首詠み込まれているが、これら①②③の歌はすべて、『新後撰和歌集』からの引用である。三首とも『新後撰和歌集』卷十二恋歌二に、収められており、特に②と③の歌は載る位置も近い。そして、二人の逢瀬の場面でも、

進之丞情の色に心とけて、其夜より一つふすまに枕をならべ、  
 ④ こそかたゆくすゑをうち物語に、夏の夜のならひ、くだかけの  
 聲とともに、あかぬわかれの泪ながら立わかる、とて、娘  
 もらすなよ道の笹原ふみわけし一よのふしの露の手枕

と、なく／＼詠じけるを聞て、しんの丞  
 ⑤ わけわかぬ袖のわかれのしの、めになみだおちそふ道柴の露  
 と、かよふに詠じつ、立わかれけるが、娘庭におる、と思へば、た  
 ちまちまきへうせて、又宵の火車村よしたつて、「ぜん／＼と空にの  
 ぼり、行衛なくなりぬ。

のように、和歌が詠み交わされる。この④⑤の歌も、『新後撰和歌集』卷十三恋歌三に、隣り合つて載る歌である。このように古歌を引用して、登場人物の詠歌のようにして挿入することは、中国臭さを消し去り、日本化するのに効果的な役割を果たしている。この方は『御伽婢子』でも用いられていたことが、富士昭雄氏「御伽婢子の

方法」(名古屋大学教養部紀要)十、一九六六年二月)で明らかになっている。つまり『拾遺御伽婢子』は、中国説話をを用いるという素材においてのみでなく、その素材を日本の怪談に仕立て上げる創作方法においても、『伽婢子』を忠実に踏襲した作品だと言える。

さらに、古歌の挿入の他にもう一点、点線部分「むかし男か茂の河なみにちかひて、神は請ずやといひしふる事」にも注目したい。これは、「むかし男」の語が示すように、『伊勢物語』第六十五段で、男が、恋を許されない立場の女への思いを断ち切るべく、河原で祓えを行い、

恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかなと詠んだことをふまえている。「みたらし河」は本来特定の神社の川を指すものではなかったが、賀茂社とともに詠まれることが多く、賀茂社の御手洗川が歌枕として固定した。よって「か茂の河なみにちかひて神は請ずやといひし」とは、この「恋せじと…」の歌を下敷きにしており、「むかし男」の名を出すことで、『伊勢物語』をはつきりと想起させる。これも古歌と並んで、日本色を強める効果がある。本話では、古歌及び古典の引用によって、日本化を図るとともに、情趣を添え、中国説話を日本の文学へと作り変えている。

## 五、巻一の三「毒蛇化」人契

前節では、先行研究ですでに原拠が示されている章段の、創作方法へと目を向け、古歌・古典の挿入について述べてきたが、再び『怪談全書』利用の指摘へと戻りたい。ここでも古歌・古典の引用が見られる。『拾遺御伽婢子』巻一の三「毒蛇化」人契の梗概を次に挙げる。

陶尾張守の一族である佐田源内は、志賀の山桜を見物に行く。そこで舟遊びをする女に出会い、女の素性を問うと、毛利家に仕えていた者の娘だと言う。源内は女の家を誘われ契りを交わす。明け方家鳴りがして気が付くと、源内は岩窟の中に坐していた。宿へ帰った源内は患いつき、一夜明けると身の肉が溶けて、白骨となって死んだ。一族の者が女の家を探し当てると、洞の中に毒蛇のわだかまる跡が残されていた。

これは、『怪談全書』巻二の一「李瑄」と、①女の使いの者が来て、主人である女の元へ誘われる、②女の家に行き、女と契りを交わす、③家に帰り、患いついて死に至る、④女の家と思しきあたりから、毒蛇のわだかまる跡が発見される、の展開を同じくする。特に、④の部分で、『拾遺御伽婢子』では、

一族皆々不審を為して、彼の下部の案内にて、さきの所を尋ね

見るに、石山の麓海辺へさし出でたる所に、いうこく遙かに尋ね入りて一つの洞あり。さし入つて見るに、毒蛇のわだかまりたる跡あり、誠に不思議なる化異なり。

『怪談全書』では、

家人、イソギ人ヲ相具シ、昨夜ノ処へ行テ見レハ、枯タル槐樹ノ中ニ、大蛇蟠タル跡アリ。

と書かれており、男が死んだのち、家の者が昨夜男の泊まった家を探し、蛇の跡を発見したことから女の正体を示すという特徴的な結末が共通する。ただし、この箇所一つを見てもわかるように、『拾遺御伽婢子』の描写のほうが、遙かに詳しい。本文全体を比べてみても、『拾遺御伽婢子』は原話をかなり肉付けし、ふくらませている。例えば『拾遺御伽婢子』の冒頭は、

去しにいしへ佐田源内といふものあり。陶尾張守が一族たり。尾張守亡て後、近江国たなかみといふ所に住けるが、家貧からず、色好みの間へあり。好んから定る妻もなく独のみ住ける。弥生始の頃なれば、四方の山々雪打とけて、霞しく遠山のしげみに、初桜の処々咲はじめたるけはひ、園くれば竹に鶯のまだ里なれぬひと声も、春めきたるけしきにいざなわれて、僕に破籠やうの物もたせて、むかしながらの山桜といひし志賀の花見んとて、友達二人三人伴ひ、志賀に行、辛崎の辺に終日甦敷て、

酒うちのみ連歌などしてけり。誠に千金にかへじといひし春の日も、はや夕陽にかたふけは、さくら花手折家つとし、いさや帰らんとて、源内古事ながら、

<sup>B</sup>桜花手ごとに折て帰るをは春の行とや人は見るらん

とうちたわむれ帰りけるが、瀬田辺にて源内小用に跡へさかりける内、友とちははるか行過ぬ。

で始まる。『怪談全書』では、李瑄の人となりについて全く書かないのに対し、『拾遺御伽婢子』の佐田源内は、陶尾張守の一族という出自の他に、傍線部分のような説明が付され、花見で出会った女を見初め、女の家について行くことが不自然でないよう、「色好み」という性格設定がなされている。そして、景色の詳しい描写が続いた後、点線部A「むかしながらの山桜といひし志賀の花見ん」だが、これは『千載和歌集』巻一春歌上に収められる歌「さゝ浪や志賀のみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな」をふまえた表現である。さらに、源内が口ずさむ、点線部B「桜花手ごとに折て帰るをは春の行とや人は見るらん」も、『詞花和歌集』巻一春に載る歌を、そのまま引用している。

また、②の、蛇の化けた女と契りを交わす場面では、しばしして十三計なる女のわらはに手燭さ、せて、彼むすめきたりねやに入

とある。『怪談全書』では

夜二入テ、年、十五六許ノ女、ミメヨキガ。白衣ヲ著テ、出テ  
マミュ、李瑄、歎喜ノ余リ、止テ一宿ス。

と書かれるのみで、童は登場しない。前節で取り上げた「遊魂之契」では確実に『伊勢物語』をふまえた部分があること、さらに源内が「色好み」と設定されていることから考えると、これも、『伊勢物語』第六十九段の、齋宮が男の寝所へ忍ぶ場面の、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。

を下敷きにした表現ではないだろうか。女の方から男の元へ行く場面として、真っ先に想起されるもの一つは、『伊勢物語』の齋宮であろう。それに倣い、女を先導する童のことが付加されたと考えられる。本話も、古歌及び古典を織り込むことで日本色を強め、文章も洗練されたものになっている。

### おわりに

今回、近世怪談本の中で、『拾遺御伽婢子』を取り上げ、新たな中国典拠として、『訓蒙故事要言』と『怪談全書』から計四話を指摘した。その上で、典拠以外の部分について考察し、その結果、作者が巧みな場面設定と古歌及び古典の引用によって、中国説話の日本化を図っていることを明らかにした。

近世怪談本における中国文学の影響についての研究は、仮名草子『伽婢子』と、上田秋成・都賀庭鐘らの前期読本に集中している感があり、それ以外の作品はあまり注目されず、取り上げられても典拠の指摘にとどまってきた。しかし、今回扱った『拾遺御伽婢子』のように、創作方法に工夫が凝らされている、興味深い作品がたくさんある。従来の文学史的分類に拘泥しすぎず、これらの作品に光を当て、典拠調査から先へ進んで作者の創作を見ることが、その作品の面白さを述べていきたい。

### 注

- ① 引用は、国会図書館蔵『拾遺御伽婢子』（143—7—13）によるが、読解の便を図り、句読点と括弧を施した。以下の『拾遺御伽婢子』本文の引用もすべて同様である。
- ② 引用は、江戸怪異綺想文芸大系3『和製類書集』（国書刊行会、二〇〇一年）による。以下の『訓蒙故事要言』本文の引用もすべて同様である。
- ③ 引用は、中之島図書館蔵『新太平記』（324、2—4—3）（寛文十一年刊）による。
- ④ 引用は、『仮名草子集成第十二巻』（東京堂出版、一九九一年）による。以下の『怪談全書』本文の引用もすべて同様である。